

平成28年度第5回「知事と一緒に生き生きトーク」の発言要旨

- 1 テーマ：高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けられる地域包括ケアシステムの構築を目指して
- 2 日 時：平成28年8月3日（水）
- 3 場 所：真庭市蒜山振興局庁舎
- 4 参加者：介護、介護予防や生活支援など地域で高齢者支援に携わっている方々 8名
- 5 知事挨拶

地域包括ケアシステムの構築をどうやって進めていくのか。いろんな方が必要だと思っているが、簡単につくれるものではない。本日は、それぞれの立場でどんな問題がある、もっとお互い協力し合うことでよくなることはないのか、もしくは制度上のちょっとした手違いで、本来こうすべきところが、なかなかうまくいっていないなどの問題もあれば教えていただきたい。地域包括ケアの構築は大きな問題であり、また、いろんな立場の方々が関わる複雑な問題でもあるので、ぜひ、皆様から、それぞれの立場での生の声を伺いたい。

6 発言内容等

- ・施設利用者の自立支援の一環として、日中おむつゼロを達成した。達成よりも維持することの方が大変だが、多職種協働の体制を確立することにより、現在も維持できている。他にも外出による地域との交流など、利用者の生活の質の向上を目指した様々な取り組みを行っている。
- ・施設で介護に携わっているが、「やっぱり自分の家がいい」という声を聞くことがある。様々な理由により、在宅生活が困難な方たちを、どのようにすれば在宅生活が続けられるようにできるかが、自分たちが考えていかなければならないことではないか。
- ・地域で高齢者を支えていくに当たり、地域とのつながりを持ち続けることや地域での役割があること、そして高齢者と私たちが日々何かつながっているような仕組みがあればいいのではないかと考えている。
- ・私の通っている大学では、地域とのつながりを大切にしており、学生が地域のボランティアに積極的に参加し、地域の方々は教育の場面での関わりを通して、学生と地域との相互活動をしている。ボランティア活動を通して、高齢者の方の生活や文化を知ることができ、介護への理解につながっている。
- ・学生だけでは、ボランティアができる範囲も限られてきているため、送迎バスの普及などにより、様々な地域や場面でボランティア活動ができるようになればと思う。
- ・地域包括支援センターで保健師をしており、去年、一昨年は、この4月に移行した総合事業の枠組みづくりに力を注いできた。その中で特に重要と考え、総合事業に先駆けて昨年度から一足早くスタートしたのが、認知症予防に重点を置いた「元気輝きエクササイズ」という取り組みだ。昨年度が7団体、今年度が8団体、延べ15団体の取り組みになっている。

- ・新しいデイサービスの形として、今まで専門職がいる事業所でしかできなかったデイサービスを、市民の皆さんができるよう、「支え合いデイサービス」という枠組みをつくっているが、検討はしていただいても実際には手を挙げてもらえないというのが、現状だ。
- ・生まれ育った地域の中で住み続けたいという思いがあり、地域を一つの家族だと思えば、支え合うことが簡単にできるのではないかと思い、支え合い、助け合いの一つとして、川掃除や草刈りといった活動をしている。また、100円カフェや500円居酒屋といった地域の人が集まる居場所づくりをしている。休耕田に地域外の方を集めて、体験をやってもらうといった活動もしている。今後は、近くに店や病院がなく、車がないと行けない方の移動について考えていかなければならないと思う。
- ・「施設ではなく家に帰りたい」と言われる方の手伝いをしていくためにも、これから訪問看護が地域包括ケアシステムの中心となっていけたらと思っているが、訪問看護ステーションが県北では一部の地域にしかないというのが現状である。
- ・町内の高齢者が集まれる場所として、ふれあいサロンを結成している。皆さんが誘い合い集まることで、欠席の人のことを気にしたり、付き合いのなかった人や、サロンにこない人のことも把握できるようになった。また、サロンの他に、週に1回体操をしており、体操とサロンで高齢者とのコンタクトがとれている。
- ・高齢者を支えるのに困難なことは、年齢とともに歩けなくなった方達の移動手段の確保であり、若い人のサポートが欲しいと思っている。
- ・認知症カフェを運営しており、地域の集まりの場の一つとして、認知症の方も気軽に憩える場所、ほっとできるスペースということで、コーヒーやお茶を飲みながら、認知症予防の体操やゲーム、劇をしたりしている。認知症カフェはそれぞれの場所で特徴があるが、私たちの所では、参加者の方が自分の得意なことを披露する場となっており、尺八やハーモニカ、歌などの活動を行っている。
- ・私たちは介護保険サービスだけではできない、制度の隙間のようなところで困っている人達をサポートできるように、生活支援や外出支援を行っている。自分たちの活動は、施設入所の先延ばしや独居生活の継続につながっているのかなと思う。また、私たちの考えで生活支援サポーター養成講座をはじめてみたが、サポーターの人の介護予防や、やりがいづくりにつながっている。
- ・所属施設ではおむつゼロ、日中おむつを使わない、排便をおむつの中に絶対しないというテーマがあり、それを進めていくことは、利用者の方の身体能力回復にもつながるし、それ自体が自立や在宅復帰へ向けての取り組みにつながるのではないかと考えている。また、こうした取り組みを施設職員が一丸となって突き詰めていくことで、介護のやりがいにもつながっていくのではないかと考えている。
- ・高齢化が進んできて、地区の行事なども高齢者の方が主体となってしているが、そういう場所に学生が参加することで、「元気がもらえる」といった言葉をもらえる。高齢者の方も一人だとなかなか出かけようという気持ちにならない場合もあるが、学生が参加し盛り上げていくことで、地域住民同士の誘いの声かけなど、住民間の関係づくりにもつながると考えている。

- ・町内会でふれあいサロンや体操の他にカフェもやっているが、地域の皆さんが集まれる場所が色々とあると、そこでまた新たなグループができるのがいいことだと思う。
- ・訪問看護の仕事をしているなかで、在宅で亡くなるといった事例が初めてあった。できるだけ家にいたいという本人の希望に沿うため、年末年始に24時間体制で対応し、主治医の先生にも協力していただき、最終的に家で看取ることができた。医療と福祉が一体となることによって、ご家族を支えていくことができたと感じた。
- ・以前は、サロンがいくつもあったが、運営者が高齢になり、なくなっている。私たちは、認知症予防のボランティアが自分たちのためにもなっていると思ってやっている。退職された方で、手がすいたから参加してみようかという人も増えているので、できるだけそういう人を引っ張り込み、うまく大勢で運営していけたらなと思っている。
- ・生活サポーターのボランティアの方や事業所のスタッフの世代交代が進んでおらず、人の確保が難しい。今の現役の人が退きかけた時に、もう少し継続させていくためのサポート等について、行政と連携しながら組織的に対応していかなければならない。
- ・雪かきができない高齢者に対して、近所の方や消防団の方が手伝ってくれる体制がある一方で、どこかに行こうと思った時に移動手段がない、1キロや500メートルといった距離を自分一人では行くのが難しい人の移動のためのボランティアの体制があるわけではない。また、ボランティアをする側では、どこで情報をもらえばいいのか分からないといった意見もあり、情報をもっと誰にでも分かるような形で伝えていけたらと思う。
- ・学生ボランティアも以前は雪かきや草取りのボランティアをしていたが、中山間地域等に行く場合の送迎や怪我をした場合の保険などの問題があり、今は、なかなか難しくなっている。今後、学生が少しでもボランティアをできるようにしていくためには、そういった課題を解決していかなければならないと思う。
- ・住民の方が安心して暮らせる町をつくっていくために、いろんな方からの意見を聞いたり、話ができるような体制づくりや、情報発信の方法など、住民の皆さんと連携していくような行政の形をつくっていかなければならないと思う。
- ・今はよくても5年、10年先には500メートル歩けない人が出てくる。その場合に、地域と介護との協働が必要になってくる。地域の中でもっと考えていかなければならない。
- ・開業医の先生達も高齢化してきており、訪問診療に行くのも、患者さんが病院に行くのも難しくなっている。後継者や新しい開業医の先生達を推奨していけたらと思う。
- ・足が弱くなった方が、ほとんど歩けなくなった場合に、どうサポートしていいか分からない。そういった場合に若い人のサポートが欲しいが、仕事もあり難しいと思うので、公の力を借りれたらいいなと思う。
- ・認知症のサポーター養成講座を行っており、約1万人ぐらいの方に聞いてもらっている。対象の方が老人クラブや地域の方が中心であったので、もっと若い人にも認知症や年をとるとはどういうことか知ってもらいたいと思い、小学校や中学校に出かけて行き、話をしている。今後は、出かけていくところをできるだけ広げていきたい。

7 知事のまとめ

これさえすれば大丈夫というものは、多分ないが、普段と違う分野で活躍されている方の話を聞いて、皆様にとっても勉強になったのではないかと思う。自分たちの活動や課題を他の人達にも知ってもらい、お互いの連携を上手くとったり、それぞれの人達が持てるものを持ち寄り、どのようにしてみんなでやっていくか。今は何とかできているが、5年後、10年後は心配だなと強く感じた。団塊世代の皆さんが75歳以上になると、医療需要や介護需要が大きくなるので、我々もさらに工夫し、また財政的には覚悟をしなければいけない。我々もがんばっていくので、地域の皆さんがほんとに岡山に住んでいて良かったと思っていただけるよう、これからもがんばっていただきたい。